

# 論文／ターム・ペーパーを書くための基本（抄）<sup>1</sup>：

## 1. 主題（トピック）の選定

軌道に乗せるには：

一番難しいのは、着手すること。あなたの論文にちょうどいい主題がすぐに見つかることはまずありえない。

主題の選定はいくつかのステップを踏んで進むことになるが、それらのステップは、必ずしも厳密に順番どおりにこなさないといけないものではない。

主題の範囲：

まずは、あなたが関心を持つことができる、主題の大まかな範囲を定めることから始めよう——あなたがその領域についてある程度知っていて、しかももっと学んでみたいと思うような、経済学に関する範囲であれば、より望ましい。

例：古典派経済学における利子率の上限について

焦点：

次に、この主題の範囲を絞り込んで行こう。注意してほしいのは、ここで考えているのがせいぜい 40 ページ程度の論文であって、あなたの生涯をかけた著作ではないという

---

<sup>1</sup> この「経済思想史における論文の書き方」日本語版が作成された経緯と、それに関する注意点について説明しておこう。この原稿の大本になったのは、Manuela Mosca (universita del Salento) が執筆し、この日本語版と同一のウェブサイト上で公開しているイタリア語版である。次いで、イタリア語版に基づいて Maria Pia Paganelli (Yeshiva University) が英語版を作成した。そして日本語版は、Mosca 教授の依頼により、この英語版を森直人（高知大学）が訳出して作成したものである。

ただし、この日本語版は十分に完成されたものではなく現在も改訂作業中のものである。特に以下の三点については、日本語版と英語版の間で内容の異なる部分があるので注意していただければと思う。

第一に、日本語版の現在のバージョンでは、英語版の一部を省略している。後に脚注で詳しく述べるが、英語版の一部は、英語の表現や文法、表記法や言語慣習、および参考文献などに関するものであり、訳者は、日本語の論文を執筆する上では重要性が低いものと判断してこれらの部分を省略した。また、英語版の冒頭には、全体の内容を要約した 4 ページほどのレジュメが付されているが、これについても日本語版では省略している。なお省略した箇所については、その都度脚注で表示しているのので、こうした内容に興味のある方は、同じサイト上にある英語版を直接参照されたい。

第二に、日本語版の現在のバージョンでは、日本語の経済思想史領域における論文執筆に関する慣習にかんがみて、一部英語版の内容とは異なる説明を行っている。そうした変更——こちらは二・三の点についてのごく小さな変更であるが——を行った箇所についても脚注にて表示しているのので、これについても関心のある方は英語版を参照されたい。

第三に、上に述べた点の他に、日本語版の現在のバージョンはいまだ試訳の段階にあり、翻訳上の誤りについては引き続き改訂作業を予定している。そのため翻訳に由来する内容の不備が存在する可能性があることをお断りしておきたい。

ことだ。あなたの選んだ範囲の中の、小さく限定された一部分だけに焦点を絞り込むことで、その部分の文献をしっかりと把握するようにしよう。

例：アダム・スミスにおける利息制限法について

問い：

今度はあなたが絞り込んだ主題の範囲の中で、具体的な問いを考えよう——単一の文で表現できるような問いを。それらの問い（あるいはそのうちの一つ）があなたの問題設定を定義し、その問題設定があなたの論文の主題となる。

まっとうな問いは、論文に費やすことのできる時間内に、それに対する答えを与えることができる（しかもその答えの根拠を示して論証することもできる）ものでなければならない。

例：

- ・アダム・スミスは、利息制限法と自由市場に関する自らの信念とを、どのようにして調和させたか？
- ・彼はどのようにして利息制限法を正当化したか？
- ・彼の考えはどの点で新しいものだったか？
- ・彼の考えはどのように受け止められたか？
- ・彼の考えに影響を及ぼしたものは何だったのか？
- ・彼の同時代人たちは、この問題についてどのように考えていたのか？
- ・現代の研究者はこれについてどのような発言をしているか？

調査：

あなたの問いに関連するものとして、これまでにどのような研究が行われてきたか、文献を読解し、あなたが答えを与えるために必要なデータを集めて行こう。

問題設定：

あなたの問いに対しては、どんな答えが与えられうるだろうか。（もちろんその答えは調査が進むにつれて変化することもある。）その想定された答えに基づいて、問題設定——つまり、あなたの論文が扱う主題——を定式化することになる。なお設定される問題は、一つか二つの明確な文で表現できるものでなければならない。

例：アダム・スミスによれば、認識の構造的なバイアスは利子率にどのような影響を与えるか？

仮説：

仮にあなたが既に調査を行ったものとして、あなたの問題に対する解答はどのようになるだろうか。その予想される解答こそ、あなたが論文の中で証明しようと試みる中心的な仮説であって、例によってこれは単一の明確な文によって表現できるものでなければならない。

あなたが提示する答えに含まれる主張には、実体がなければならない。言い換えれば、そこには重要性のある具体的な問いが必要になる。たとえば、「スミスにおける利息制限法に関する議論」という主題は、実際には何も言っていないに等しい。こういった主題についてはさらに、スミスの立場の何が興味深く、どこに問題があるのか、といったことを考える必要がある。

またあなたの主張は、それについて議論し、検証することが可能なものでなければならない。つまりあなたの仮説以外の仮説も立論可能でなければならない——もっともその上で、あなたは様々な論拠と議論を組み合わせ、自分の仮説が最良の答えであることを論証しなければならないわけだが。

例：アダム・スミスが利息制限法を擁護した理由は、情報の構造的なバイアスにより、利子率に関して市場の失敗が生じると考えていたためである。

論文の題目：

論文の題目は、あなたの主張の内容を示すものでなければならない。無意味に難解な専門用語は避け、手短かに内容を伝えられるような題目を考えよう。また題目は、読者の関心を惹くように作られなければならない。

例：

- ・市場の失敗という錯覚：アダム・スミスにおける高利
- ・アダム・スミス：自由市場か規制市場か？いかにして錯覚から利息制限法が必要となったか

論文の計画：

あなたの問題設定と仮説を、短い（1ページほどの）文章に書き出してみよう。またここでは、あなたの議論が辿る筋道を手短かに説明し、その議論を支えるためにあなたがどのような情報を使おうと考えているか（またそのデータの分析に用いる方法）を示しておこう。

この計画は、後になって（ある程度までは）あなたの論文の導入（イントロダクション）

として使うことができるだろう。そこで、この計画に関しては、明確に、手短に、そして読みやすく——あなたの問題設定と解答に向けたアプローチに、読者が関心を持ち、先を読みたいと思う気持ちを起こすように——書くことが重要になる。

## 2. 研究・調査に利用可能な資料

### 図書館：

あなたの調査に必要な素材のほとんどは、あなたの所属する大学の図書館の中で、あるいはその図書館を通じて、見つけることができるだろう。したがって図書館の様々な設備に慣れておくことが重要になる——オンラインの蔵書目録や、その図書館で契約している学術出版物のデータベースは特に役に立つだろう。

もしそういったオンラインの目録を使って図書を検索する方法がわからず、誰かの手助けが必要なときには、図書館に行ってレファレンス・デスク（レファレンス・コーナー）で質問してみよう。

またこういった資料を直接利用することができるように、自分のコンピュータを準備・設定しておこう。

図書館の所蔵するその他の情報についても、レファレンス・デスクで確認しておこう。たとえばマイクロ・フィルムや文庫の類、それにその他のより専門的なレファレンス資料などがある。

### インターネット：

図書館を通じて利用できるデータベースに加えて、誰でもアクセスできるデータや文献もある。そのうちのいくつかについては、この文章の中でも触れているので参照してみたい。

特に、他のサイトへの「リンク」ページのあるサイトに注目しておこう。そういったサイトはウェブ上で資料を見つけるときに非常に役に立つ。

### 資料：

全ての資料が同じように役に立つわけではない。一般的には次の三つの区別がある。

**一次資料**：一次資料とは、あなたの研究に関わる「生の」データを含む原資料を意味

する。

**二次資料**：二次資料とは、一次資料・データに基づいて他の研究者が執筆した文献を意味する。あなたは、自らの議論の支柱とするためにこうした文献に言及したり、それを引用したりすることになるが、その支柱の強度を決めるのは、それらの文献の著者に対する一般的な評価であるということに注意してほしい（もしある二次文献が、あなたが利用したいと思う何らかの一次文献の写しを提供し、あるいはそこから引用を含むものであるならば、その一次文献を引用した上で、その引用の中で二次文献の出典を明記するように）。

**三次資料**：三次資料は、不特定の読者に向けて書かれた一般的な解説ないし概説であって、多くの場合二次文献に基づいている。これらは研究の当初の段階において、あなたが扱おうとする領域についておおよその知識を得るためには有用であり、またおそらくそこから関連する一次・二次文献について知ることができるだろう。ただし三次文献は、必ずしも信頼の置ける資料と考えるべきではない。もしあえて三次資料を引用するのであれば、その持つこうした限界をあなたがしっかりと理解していることを示した上で引用するように注意しよう。

ノートの手書き：

調査の進行はノートに記録してゆく。

資料を読んでノートにメモを取るときには、それが資料に対するあなたの評価を記したものか、その資料の議論を言い換えたものか、それとも直接引用したものか、後であなた自身に分かるような書き方をするように注意してほしい。学問の世界で自分自身の息の根を止める一番確実なやり方は、故意であれ過失であれ、剽窃を行うことなのだから。

ノートに引用をメモする際には、その資料を所蔵する図書館の電話番号も一緒にメモしておこう。そうすることで、後になってその資料をもう一度読んで考える必要が生じたときに、それを簡単に見つけることができる。またこういった出典に関する情報は、あなたが論文の参考文献のセクションを組み立てるときにも必要になる。

時には資料の一部をコピーしておくことも便利だが、そのときにも出典情報をメモしておくのを忘れないように。書籍について言えば、メモする代わりにタイトル・ページをコピーしておくのも便利だが、多くの場合、出版年の記載はタイトル・ページよりも

後ろに来るということに注意しておいてほしい<sup>2</sup>。

出典情報：

全ての資料について、それを調べた後には必ず以下の情報（のうち、該当するもの）を記録しておこう。

- |                 |                        |
|-----------------|------------------------|
| ・ 著者            | ・ 書名（と副題）              |
| ・ 出版年（または出版年月日） | ・ シリーズであれば、そのシリーズ名と編者名 |
| ・ 版数            | ・ 出版社と出版地              |
| ・ 巻号            | ・ ページ数（〇〇－××ページ、という形で） |

### 3. 議論を組み立てる

構成：

一つの論文は一つの議論として組み立てられなければならない。つまり論文は、ある中心的な主張を論理的に説明し、全体としてその主張を支えるという構造を持たなければならない。

自分の選んだ主題に関連する領域を調査する中で、あなたの手元にはたくさんのノート、データ、そして引用が集まってくる。けれども、論文とは、これらの情報をただ単に並べ立てて、あなたがどれだけ勉強したかを誇示するためのものではない。あなたがどれだけたくさん勉強したか、それにどれほど多くの時間を費やしたかということは、実際のところ、あなた以外は誰も関心を持たないことなのだから。あなたがしなければならないのは、これらのノート、データ、引用を、それぞれがうまく機能するように正しく組み上げること——つまり、あなたの主張が説得的でしかも興味深い、と読者に思わせるようにデザインされた、首尾一貫した一つの議論の形へと、それらの情報を組み立てることなのだ。

議論：

ここで筆者が「議論」argumentsと言っているのは、けんか腰の口論のことではなく、また何らかの主張を一方向的に提示してそれを読み手ののどに無理やり押し込もうとするような攻撃的な長広舌のことでもない。ここでの議論という言葉については、次のように考えてほしい。あなたは、自分が暖めてきた新しい考えを、ある知的で、しかも懐疑的であるような友人に伝え、理解してもらおうとしている。そのときに、あなたとその友人の間で行われる対話 conversation、これが筆者の言う意味での議論だと

---

<sup>2</sup> 英語版においてイタリックで強調されている箇所を下線で示している。以下同じ。

考えてほしい。

論文の中では、もちろんあなたは一貫して話し手の役を引き受けることになるのだが、しかしあなたは読み手の側で生じうる誤解や反論に耳を傾けるようにしなければならない。つまり議論を組み立てていくとき、議論を一步進めるごとに、あなたは読み手の反応を想像し、読み手を感じるであろう困難を予測し、読み手が困惑するような論理の飛躍を避けるよう努めなければならない。

構成要素：

あなたの論文が提示する議論には——また、その議論全体を構成する一部分としてあなたが提示する下位の議論全てについても——以下の要素がそろっていなければならない。

**主張：**主張とは、あなたが伝えようとする内容を明確に書き表したものを意味する。

**主張の論拠：**主張の論拠とは、主張を支えることができる根拠または前提を意味する。

**論証の根拠：**論証の根拠は、あなたの示す根拠を主張につなげるためのもので、ある証拠がどのようにしてあなたの主張を支えるのかという点について説明する。

**想定される反論：**もしあなたの議論に対して何らかの反論を予想できた場合には、それにどのように応じるかという点について説明しておこう。

**限定：**限定とは、あなたの主張が妥当する領域の範囲と限界——たとえば、どのような条件の下ではその主張が通用しないか、といったこと——について、適切な説明を加えることを意味する。

根拠：

通常、あなたの論文の大部分は根拠を提示することに費やされるだろう。あなたの提示する根拠に読者を納得させる十分な力がなかった場合には、あなたの議論は、表面上どれだけでもっともらしく見えたとしても、失敗に終わることになる。

したがって根拠には、人を説得できるだけの十分なクオリティが必要になる。そこでまず根拠の正確性をチェックしなければならない——もしあなたが明らかに不正確な、あるいは矛盾した根拠を提示したならば、あなたはせいぜい良くても不注意な研究者と見なされるだろうし、その根拠は（それにあなたが提示するものは何であれ）あな

たの主張の妥当性を支えるものとは見なされないだろう。またあなたが提示する情報の元になる資料についても注意しなければならない。たとえば三次資料の権威は、一次・二次資料に比べて大きく劣っている（したがって、読者に対する説得力もはるかに低いものとなる）。そしてもしその情報が（学術的な見地から）定評ある研究者や出版物から得られたものでない場合には、その情報を使うのはあきらめるべきだろう。

#### 論証の根拠：

あなたの提示する根拠と、その根拠を使って支えようとしている主張との間のつながりが、読者にはっきりと理解できるよう十分な注意を払ってほしい。読者に向かって、ただ単に引用文を放り出し、その引用の意図は読者が理解してくれるだろうと考える、そんな書き方はありえない——引用について説明する責任はあなたにあるのだから。その根拠のポイントがどこにあり、それがどのように重要なかを説明しなければならない。根拠と主張の間に誰でも容易に理解できる論理的なつながりを明示すること、これがあなたのやるべきことだ。

論拠と主張とを結ぶこの論理的な結合は「論証の根拠」——すなわち、ある主張が何らかの根拠から導かれうるか否かを判定する基準として、通常認められている前提または法則——と呼ばれる。あなたの読み手が明らかにこういった法則を知っている場合には、わざわざ説明する必要もないかもしれない。しかし論証の根拠について、そしてその根拠を説明する必要がある場合について、常に注意しておくのは有益なことだ。

論証の根拠は、それ自体が妥当性を持ったある主張だが、しかし通常はあなたの論文の主題となるような限定された個別的な主張に比べ、より一般的で抽象的な次元に属する主張であることが多い。たとえば、

主張： 1981-82年の不況の原因は、連邦準備制度理事会がマネー・サプライの引き締めを行ったことにある。

根拠： データによれば、1980-81年には、貨幣量の増加率が低下していることがわかる。

論証の根拠： 一般的に、不況は銀行信用の引き締めによって生じ、貨幣量の増加率の低下は、この引き締めの適切な指標であると考えられている。

論証の根拠について、実際にその説明を書いてみると実はそれが明白なものでなかった



とか、あるいはそれ自体が理論ないし根拠による論証を必要とするものだったとかいう場合があることにぜひ注意をしておいてほしい。

反論：

あなたが優れて知的な読者と対話し、議論しているところを想像して、その人があなたの主張に対しどんな反論を持ち出してくるか考えてみよう。その上で、あなたの論文の中で、その予想される批判に直面してもあなたの主張が崩れないことを示し、その理由を説明しておこう。

また、あなたが自分の主張について行った一般化に対し、その反例となるようなものがないかどうか、考えてみよう。あなたの読者は実際にそうした反例を考えながら読むだろうから、この手順によってあなたは読者の考える反論を先取りできることになる。もし何か問題になりそうな点を思いついたなら、その問題を論文の中で提示し、それが実際には反例にはならないということを説明しておこう。

このように、生じうる反論に注意しておくことは、あなたの説明の説得性を高める上でとても役に立つ。それに加えて、そしてより重要なこととして、この手順によってあなたは自分の議論の弱点を知ることができる。そういった弱点については、より多くの根拠や理論的な証明を探し集めることによって、真剣に対応しておかなくてはならない。

もしあなたが想定された反論に打ち勝つことができない場合には、誰も気づかないことを祈ってそれを無視する・・・などということはずいぶん、その点についてははっきり認めておこう。そういう点に読者はまず気づくものだし、あなたがそれを見逃したものと考えて、あなたの能力についての評価を下げることになるだろうから。

限定：

あらゆる範囲で妥当するような完全な一般性を持つような主張はほとんどない——ほとんどの主張は、ある特定の状況について提示されるものであり、あるいは特定の制約条件の下でのみ妥当する。そこであなたは自分の主張の一般性に対するこうした限定を明確に述べるように意識する必要がある。

主張を明確に制限するというこの注意は、学術的な論文としての品質を保証する刻印の一つと考えてほしい。度を過ぎた主張はずさんな研究の確実な証拠と受け取られる。「通常は」とか「おそらく」とか「～と考えられる」といった表現は、使い過ぎれば弊害もあるが、あなたの主張を的確に限定しその限界を示すのには役に立つだろう。

したがって、使い過ぎてはいけないが（結局何も主張せずに終わることになるので）、使わなさ過ぎるのも望ましくない。

社会科学の諸分野では、様々な原因と結果が複合していて、しかも複雑に絡み合っている。ある原因は、それを補う何らかの出来事がなければ働かないかもしれない。またある原因は、互いに影響を及ぼしあう多数の結果をもたらすかもしれない。さらにまたある原因は、その結果に対するフィード・バックを含むかもしれない。直線的で単純で限定の無い因果関係を提示することは誰も求めてはいない——したがって、少なくとも対象について比較的目立つ個別的な性質の違いを見落としただけのためにあっさり論破されてしまう、などということにならないように注意しよう。

#### 4. 文体について

読み手：

指導教員と、指定された「副査」とが、あなたの読者になる。もちろん彼らは、あなたの論文を読んでそれについて真剣に考えることに同意しているわけだが、だからといってその仕事を必要以上に難しくするのは無意味だろう。

文法やつづり、句読点についてのつまらない間違いは、読者の注意をかき乱し（そして彼らはあなたが何を言おうとしているのか理解するためにあいまいな文章を何度も読み直す羽目になり）、そのうえ一体あなたが自分の話していることを理解しているかどうか、彼らに疑念を抱かせることになるだろう。

また、言葉のこうした基本的なルールを押さえること以上に重要なのは、あなたの論文に知的な面白さを与えることだ。あなたは、ぜひとも解かれる必要のある問題を提示すべきであって、そのためにその問題の本性について明確かつ魅力的な説明を与え、それによってあなたの示す解答に読者が興味を抱くようにしなければならない。

またあなたは、その問題から出発して解答へと至る一つの議論を展開するのであり、この議論を論理的なステップを踏む形で提示しなければならない。無理な推論をしたり、まったく無関係な議論にはまり込んだりしないように。手短かに言えば、あなたの議論は容易にその筋道を迎えるものでなければならない。

あなたが根拠を提示するのは自分の議論を論証するためであって、それを埋葬するためではない。そのため論文には、あなたの議論を前へと進める上で有効なデータや実

例だけを使うようにしなければならない。

問題に対するあなた自身の深い関心を読者に伝えるために、その問題の重要性についての信念があなたの文章に表れるようにしてほしい。鈍感な、変化のない、退屈で、醜い散文を書いて読者をうんざりさせないように。

要するに、あなたの目指すべき（そして何度も校正しては書き直し、校正しては書き直すことによって到達すべき）文体は、明確性、論理性、簡潔性、主題との関連性、適切な文法、正しいつづり、句読点の適切な使い方、そして読者の関心に対する十分な配慮という条件をみたすもの、ということになる<sup>3</sup>。

こうした点についてさらに知りたい人は、[www.rong-chang.com](http://www.rong-chang.com) というサイトを訪れてみてほしい。このサイトには、第二言語として英語を学ぶ学生にとって有用な多くの情報へのリンクが張られている。特に” Writing” と” Grammar” のリンクを参照してほしい。

#### 明確性：

もしかするとあなたは、難解で高度に専門的な主題を扱う場合、それを表現するために非常に複雑で専門用語だらけの文章を書かなければならない、などと考えていないだろうか。だとしたらそれは間違っている。そうした文章は、たいていの場合主題そのものの難解さによるものではなく、単に散漫な思考に由来するものだからだ。もしあなたが何事かについて適切な明確さをもって説明することができないとしたら、あなたはそれについて十分に理解できていないのだと考えたほうがよい（そしてあなたの読者はそのように受け取るだろう）。

ただし、自分の考えを論文にまとめようとする一番最初の段階で、あなたの書いた文章がややこしく混乱したものだったとしても驚くにはあたらない。それはとても自然なことだからだ。しかしその最初の文章は、読者に向かって提示する前に、きれいに整理されなければならない<sup>4</sup>。

---

<sup>3</sup> ここに挙げた八つの条件のうち、「明確性」に関する説明の一部分と、「適切な文法」、「正しいつづり」、「句読点の適切な使い方」、「読者の関心に対する十分な配慮」という四つの条件についての説明は、この日本語版の現在のバージョンでは省略されている。この訳稿の基となった英語版の対応する箇所では、これらの項目について英語で書く上での注意点が説明されているが、その箇所を日本語に翻訳することにはほとんど意味がないと考えられるからである。これらの点について、日本語で書く上での注意点については、今後この訳稿を改訂していく中で補足を試みたいと考えている。英語論文を書く上での注意点について関心のある方は、この訳稿が置かれているのと同じサイト上にある英語版を直接参照してほしい。

<sup>4</sup> 英語版ではこれに続く箇所で、英語論文における望ましい主語の使い方についての説明がなされているが、前注で述べた理由により、この日本語版では省略している。

それから、決してごまかしをしないように。あなたが実際のところ何を言おうとしているのか読者が戸惑ったり、あるいは——悪くすれば——あなたが実際には良く知らないことについてでっち上げようとしているのではないかと彼らが考えたりするような事態を回避する努力を、あなたは行わなければならない。そのために以下のようなあいまいな言葉や表現を探し出す（そしてあなたの原稿を校正するときに取り除いてゆく）ようにしてほしい。

- ・「いくつか a few」、「いくらか some」、「ほとんど most」、「多数 many」、「多く lots」、「ほぼ almost」、「たいてい often」、「一般的に generally」（これらの表現は、無理に普遍化された主張を限定する場合には有用だが、具体性を欠いたごまかしの表現と受け取られることもある）。
- ・「あまり…ない not much」、「いくぶん somewhat」、「多量の great deal」、「高度の蓋然性 a high probability」（おそらく少しの調査を加えるだけであなたはもっと具体的な数量や程度を示すことができるだろうから）。
- ・「効果的な政策 efficient policy」、「望ましい法令 good law」、「最適な統制 optimal regulation」（判断の基準も示さないで評価を入れるのは避けたほうがいい。もしもそうした評価を行うことがあなたの議論にとって是非とも必要な場合には、あなたの評価の基準とその視点を定義しなければならない）。
- ・「麻薬乱用を阻止しうる法令 law to stop drug use」、「失業問題を解決しうる財政政策 fiscal policy to cure unemployment」（意図と実際の結果との混同は避けるように——でなければあなたの常識が疑われることになるから）。

#### 論理性：

一つの段落（パラグラフ）は、一つの特定の考えに的を絞り、そしてその段落を構成する文（センテンス）は、その考えを論理的に組み上げてゆく過程を描き出すものでなければならない。それぞれの段落は、あなたの議論を進める上での一つ一つのステップを構成し、段落の中のそれぞれの文はその議論の進行に関連した、必要な内容を持つものでなければならない。

この点に関しておよそ考えうる最悪の書き方は、互いに明らかに無関係な一連の文を一つの段落の中で読み手に提示してしまうということだ。その場合、読み手は立ち止まり、自分がどこかで読解を誤ったのだろうかと思ひ悩み、どうすればそれらの文をあなたの議論（と推測されるもの）へとつなぎ合わせることができるかと考え込むことになるだろう。たとえば次の段落を見てほしい。

「ケインズは、資本市場が十分な投資需要を生み出すとは信じていなかったので、投資量に対する政府の介入を望ましいものと考えた。彼は、ベルサイユ和平条約に対して雄弁な批判を行った。」

また論拠を提示する際には、その論拠が、それによって論証しようとするあなたの主張と明確に関連したものとなるように十分な注意を払ってほしい。なぜなら、あなたの方ではその関連をよく知っているとしても、読者にはそれがわからないことがあるからだ。たとえば、

「これまでの研究によれば、個人は自分の収入のある所与の一部分を確実に消費することがわかっている。したがって消費者支出の総計は、消費サイクルを研究する上で非常に有用な指標となる。」

この一般化を支える論証の根拠を、どこに見出すことができるだろうか？この結論は必然的に導かれるものだろうか？もしこういったことが自明でないとするなら、それを説明しなければならぬだろう。

#### 簡潔性：

簡潔性は機知の真髄であるが、また説得力ある論文の真髄でもある。論文を構成する一つ一つの文の、そのまた一つ一つの言葉でさえも、その論文全体のために何らかの役割を担うものでなければならない——もしそうした役割を担わないものがあれば、削ってしまわなければならない。

あなたが論文で行うのは、ある特定の議論を組み立てることなのだから、脱線した無関係な論述によってその議論を妨げてはいけない。全ての段落が、あなたの議論を支え、先へと推し進めることに貢献しなければならない。もしそういう貢献をしない段落があるなら、省いてしまわなければならない。（もしも自分の議論に直接に関係しない意見や洞察で、どうしても省くわけにはいかないと感じるものがあるときには、注を使うように——ただし注は決して使いすぎないように。）

苦勞して書いた文章を削るのは嫌なもので、このアドバイスにはなかなか従いづらいただろうと思う。けれどもあなたが中心的な論点から離れることなく自分の議論のみに沿って話を進め、無関係な内容で時間を浪費させることがなければ、読者はきっとあなたに感謝することだろう<sup>5</sup>。

---

<sup>5</sup> 以下の箇所において、英語版では、「適切な文法」、「正しいつづり」、「句読点の妥当な使い方」、「読者の関心に対する十分な配慮」という四つの条件についての説明がなされているが、既に述べた理由から、こ

## 5. 形式についてのガイドライン

### 表紙：

論文の表紙の雛形は大学・学部ごとに決められているので、それがどんなものか見ておくために、あなたの学部の事務職員の人に、表紙のサンプル、ないし以前に書かれた論文の表紙が手に入らないか訊ねておこう。

### 謝辞：

あなたは、論文の手助けをしてくれた仲間や指導教員、または友人に謝辞を述べたいと思うかもしれない。もしあなたがこうした謝辞を論文に入れると決めたならば（この点は任意だが）、その謝辞は次の節で説明する仕方に従って、注で示すのがよいだろう<sup>6</sup>。

### 要旨：

誰かがその人の研究にとって重要な論文を探しているとして、その人があなたの論文をじっくり読んでみるべきかどうか決める上で十分な情報を得られるように、あなたの仮説と、その仮説を支える論拠を一つの段落に短くまとめた要旨を準備しよう。要旨は、独立のページに置くように。

### 目次：

目次は、読者があなたの論文の構造を頭の中で組み立てる上で役に立つ。ただしそれがどの程度役に立つかということは、節ごとに、それぞれの内容を示す適切な見出しをつけられるかどうかにかかっている。特に修士論文の場合、目次は必ず付けて、これも独立したページに置くように<sup>7</sup>。

### 導入（イントロダクション）：

ここがあなたの論文の出発点なので、新しいページから始めること。導入には、他の節とは異なり、節としての見出しは付けないように。この部分で大事なことは、論文で扱う内容を読者に伝えるということ——あなたの問いと、それに対する答えである

---

の日本語版では省略している。

<sup>6</sup> 英語版では、独立のセクションを設けて謝辞を述べるという選択肢が示されているが、訳者の知る限り、日本の経済学史領域における修士論文ないしターム・ペーパーの執筆に関して謝辞に独立のセクションを充てることは一般的ではないと考えられるため、ここでは英語版と異なる説明となっている。

<sup>7</sup> 英語版では目次に独立のページを設けるかどうかは任意となっているが、前注と同じ理由から、ここでは英語版と異なる説明を行っている。

あなたの主張とを説明するように。

また、できる限り明確で魅力的な形で説明を行うこと。「この論文において議論する内容は・・・」などといった大仰な決まり文句は用いないように。

論文本体：

ここであなたは、自分の議論を支える論拠の様々な道筋を提示し、その背景を描き出し、関連する先行研究をまとめることになる。特に論拠と主張を関連付ける明確な議論を立てるよう注意してほしい（つまり、論拠がどのようにして主張を論証するものとなるのか、という点を明らかにしてほしい）。

本体は、一連の節によって構成され、それぞれの節には短く内容を示した見出しをつける。一つの節に技術的なデータやその派生物を詰め込み過ぎないこと——そうしたデータの提示には、「補遺」（後述）を用いることができる。また決して脱線しないこと——もしどうしても脇道に入る必要があるときには、注を用いるように。

結論：

結論部分では、あなたの主張をもう一度記述し、そこに至るあなたの議論を要約すること。結論で提示される主張が、導入の中で提示された主張と一致することを、必ず確認するように！

もしあなたが、自分の結論に基づいて行われるべき新しい研究について何か手短に提案できることがあるなら、提案しておこう（このことはあなたの仮説が実り多いものである——つまり、他の研究者たちが彼ら自身の目標を追求する上で有用である——可能性を示すうえで有効なことだから）。

補遺：

このセクションは、あなたの議論に必要な内容で、しかも本体に入れてしまうと混乱を生じ、あなたの議論の本筋から読み手の注意を逸らしてしまうような内容を提示するためにある。補遺は、新しいページから始めること。

注：

注とは、本文の内容に対して順番に数字を振って記されたコメントである。

注には二つの形式——脚注（言及先の本文と同じページの下部に記載される注）と、後注（論文全体の最後に、独立のセクションに一まとめにして示される注）——があ

る。どちらを選ぶかはまったく任意だが、もしもあなたが注によって読者の注意を議論の本筋から逸らしてしまうのはよろしくないと思う場合には、後者の注がより望ましいだろう。

#### 参考文献：

論文の中で行った何らかの資料からの引用、また参照したデータなどは全て、論文の最後の部分にまとめて（主たる著者の姓のアルファベット／あいうえお順に）示さなければならない。これは、絶対に不可欠のセクションであることに注意してほしい——もし出典を示すべき文献が何もないとしたら、あなたは剽窃を行ったのだ。そうでないとしたら、行うべき調査を行わなかったとしか考えられない。

出典の雛形についての説明や、実際に出典を示す際の具体例などについては、次の形式についての手引きを参照してほしい。

#### 形式についての手引き：

The American Economic Review は、経済学の論文を執筆する人のために「形式の手引き」を出版しており、これについてはオンラインで利用することができる ([www.aeaweb.org/aer/styleguide.html](http://www.aeaweb.org/aer/styleguide.html).)<sup>8</sup>。

ただしこれはあくまでも手引きであって、決められた規則のリストではない。もしあなたがいくつかの点で異なる形式を使いたいのであれば——その形式が明確で首尾一貫したものである限りは——それを使っても差し支えない。

## 6. 資料を論文に組み込む

#### 目的：

あなた自身の議論について説明するために他の人の研究を利用する場合には、あなたは資料の参照を行うことになる。参照した資料を明示するのは、単に一般に行われている礼儀、といった性質のことではない——それは、学問上の手続きにおける根本的なルールだと考えてほしい。学問以外の社会生活における、たとえば所有権とか夫婦の貞節といった根本的なルールの場合とまったく同様に、参照に関するルールを破ることは、きわめて重大な倫理的問題を引き起こす。学問の世界で剽窃を行うことは、

---

<sup>8</sup> なお、日本語での出典表示については、経済学史学会の学会誌『経済学史研究』の投稿規程に記載されている執筆要領を同学会のウェブサイトで見ることができるので、必要な方は参照されたい (<http://society.cpm.ehime-u.ac.jp/shet/annals/het47-50/instructionj0605.pdf>、2008年1月13日参照)。



店で盗みを働くこと、民主主義国家の選挙で不正を行うことに等しい罪なのだ。

あなたが資料を利用するのは自分の議論を支えるためであって、資料を自分のものとするためではない。一次資料はあなたに情報とデータを——あなた自身が分析して活用しなければならない材料を——提供する。二次資料からは、根拠として利用可能な知識や、基本的な概念についての特に鮮やかで的確な説明の仕方を得ることができる。

資料を明示的に利用することは、あなたのオリジナリティをなんら損なうものではなく、あなたの論文の評価を落とすものでもない。むしろ反対にそのことは、優れた学者に共通することだが、あなたが他者の研究に依拠しつつ、それらの研究を効果的に自分の論文に組み込むことができる誠実な研究者であることの証となる。

原則：

**資料を過剰に利用しないこと：**他の人の研究を用いる目的はあなたの議論を補強することであって、あなたの議論を肩代わりしてもらうためではない、ということに注意してほしい。あなた自身の議論を展開する部分があなた自身の言葉で語られていることをいつも確認するように。

**基礎資料を明確に区別すること：**どこからどこまでが資料から取り出した言葉で、どれがあなた自身の言葉なのかということが、誰が見てもわかるくらい明確になるよう意識すること。資料を直接引用せずに要約して利用する場合でも、どの考えが誰のものなのかを明示しなければならない。

**基礎資料をあなた自身の議論と関係付けること：**利用された基礎資料が、あなたの議論を進める上でどのような重要性を持っているか、読者に明確に理解できるものとなるよう注意してほしい。

**資料の意味を捻じ曲げないこと：**資料の内容を別の言葉で言い換えるとき、また資料の一部分を選択的に引用するときには、その言い換えや選択によって原著者の意味する内容が誤って提示されることのないように十分に注意しなければならない。「本来の文脈から外れた」引用をしてしまうこと——引用文を正確に理解するうえで決定的に重要な箇所を引用しないことによって、その文の意味を（時には本来の意図とは正反対の意味にまで）改変してしまうこと——は、容易に起こりうるのだから。

**出典情報を詳しく表示すること：**出典を示す目的は、利用した資料に感謝の意を表すためだけではない——出典を示すのは、読み手が興味を持った時に、その人が実際に

原資料にあたるようにするためでもある。そのため、何らかの図書から特定の箇所を引用する場合には、その本全体として出典を示すのではなくて、該当するページ数を示すようにしなければならない。

#### 出典の表示：

資料の出典を示す正式なやりかたは複数存在していて、どれを用いても問題はない。ただしどんな場合でも、出典の表示は、一貫した形式に従い、そして他の研究者が問題の資料を特定する上で十分に明示的なものでなければならない。ここでは、イメージをつかむための一例として、「著者／出版年」形式の表示について見てみよう。この形式では、出典の表示が「(著者 出版年)」または「(著者 出版年、ページ数)」というように行われる。この出典表示は、それ自体が「参考文献」のセクションへの参照指示として理解されるものであり、そしてそのセクションにおいて出典を特定するための情報が詳しく述べられることになる。たとえば、

「しかし、この長期という考え方は、進行中の問題に対しては誤った指針となってしまう。この意味での長期においては、われわれはみな死んでしまっていることだろう。仮に経済学者の仕事が、ハリケーンの時期に、嵐が過ぎれば海は再び穏やかになるだろうなどという予測を立てることだけだとしたら、そんな仕事は誰にでもできるだろうし、何の役にも立たない。」(Keynes 1923, 80)。

Keynes, John Maynard (1923) *A Tract on Monetary Reform* London: Macmillan.

この出典情報を示すには、いくつか異なる形式——引用文をあなたの議論にスムーズに組み込むための省略など——も可能である。特に、もしあなたがごく近い箇所で、原著者の名前に既に触れていたなら、それを繰り返す必要はない。たとえば、

ケインズの有名な「この意味での長期においては、われわれはみな死んでしまっていることだろう」(1923, 80) という発言は、貨幣数量説を批判する文脈で現れる。

Keynes (1923, 80) は、長期の貨幣数量説を痛烈に批判している。いわく「この意味での長期においては、われわれはみな死んでしまっていることだろう」。

同じ文献から繰り返し、ただし異なるページを引用する場合には、出典情報をページ数のみにまで省略することができる。また(あなたの論文の同じ段落の中の)一続きの引用が同じ文献の同じページを参照するものであるなら、出典情報を繰り返し示す必要は

ない。

ケインズの有名な「この意味での長期においては、われわれはみな死んでしまっているだろう」（1923、80）という発言は、貨幣数量説を批判する文脈で現れる。そしてそれは、これまでに何人かの論者が批判したような、軽薄な皮肉などではない。その発言は、そこで論じられている理論に関連した政策に対する批判なのである——彼はそれが「進行中の問題に対しては誤った指針」であると主張している。

一般的には、どんな形であれ引用した文章に変更を加えるべきではない。（ただし、引用文から一部の文章を削ったり、逆に挿入したりする時のルールについては、以下で述べる。）しかし、傍点や下線（英文であればイタリック）を加えたり削除したりすることは、それが原著者の意味するところを変形してしまわない限りにおいて、認められている。そうした変更を行う際には、引用に際してその点を明記しなければならない。たとえば上の例文は、より正確には「（1923、80、ただし原文のイタリックは削除した）」と書かなければならない。

引用：

一般に、あなたは自分が組み込みたいと思う引用文が、あなた自身の文章とつじつまが合うように、自分の文章を組み立てなければならない。通常は、次に示すように引用に対応する文章を用意する。

ケインズは「この意味での長期においては、われわれはみな死んでしまっていることだろう」（1923、80）と皮肉を述べたが、しかしわれわれは彼の言う長期の中で生きているのだ。

非常に長い引用を行うためには——読者に原著者の言わんとするところを特にはっきりと理解してもらおうとあなたが望むのであれば、そうした引用が必要になる場合がある——「ブロック・クォーテーション」という形式を使うことが望ましい。その場合には、引用文それ自体を、その出典情報とともに、地の文よりも一定字数ひっこめた独立の段落として表示し、引用符は用いない。この形式での引用文には、その前にあなた自身の言葉で導入的な説明を置き、かつ、その後ろにもあなた自身の補足的な説明を入れなければならない。

引用文を短くするため文中から何らかの文章を削る場合には、削られた部分を省略符号で表示する。たとえば、

Keynes (1923, 80) は、貨幣数量説は政策判断を行ううえで信頼できる指針にはならないと批判した。大まかに言えば、数量説は、貨幣量を二倍にすれば物価も二倍になると考える理論であり、そしてケインズも指摘するように『長期的には』このことはおそらく真だろう・・・しかし、この長期という視点は、現在生じている問題に対しては誤った指針なのである」。

もし引用文中に（たとえば明確化のために）文章を加える必要があるときは、付け加えた文章を角括弧で囲む。

ケインズは、とりわけいま問題にしている理論が政策的にまったく無意味である点を酷評していた。彼は「この意味での〔貨幣数量説で言うところの〕長期においては、われわれはみな死んでしまっていることだろう」（1923, 80）という有名な言葉を遺している。

引用文に文章を加えるにせよ、引用文から文章を削るにせよ、あなたはその変更が原著者の意味するところまで改変してしまわないように十分注意しなければならない。あなた自身の議論に都合が良くなるように原著者の意味するところを改変することは、剽窃と同じほど非常に重い罪になる。実際に、次の仮説的な例を見ればわかるように、単に文脈と無関係に引用を行うことによって、読者を偽ることが可能になってしまう。

ケインズは、確かに「この意味での長期においては、われわれはみな死んでしまっていることだろう」（1923, 80）と皮肉を言ったが、しかしそのことはなんら政策において短期的な方策を用いることを正当化するものではなかった。

もしあなたが引用しようと思う資料に間違いが見つかったとき（たとえばつづりの間違いや言葉の誤りなど）、そうした誤りは訂正せず、その直後に「〔原文のまま〕」と記入して、あなたがその誤りに気づいていることを示す。たとえば、もしも仮にケインズが誤って「死んでしまっている」を「死んだしまっている」と書いていたならば、次のように引用すればよいだろう。

ケインズは、「この意味での長期においては、われわれはみな死んだしまっている〔原文のまま〕ことだろう」（1923, 80）と述べている。

言い換え：

あなたは場合によって、資料を直接引用するよりも、資料にある考えをあなた自身の言葉で表現してみたいと思うこともあるだろう。これは完全に認められるやり方ではある。

ただし、あなたはその出典を明示しなければならない——そしてあなたは、実際にあなた自身の言葉で、言い換えを行わなければならない。

資料の表現を表面的に変えただけの文章を言い換えとして提示することは認められない。たとえば、ケインズの言葉を次のように使ったとしたら、それは実際には微妙な形式を取った剽窃に他ならない。

Keynes (1923, 80) は、経済理論が短期の問題を回避することを非難し、経済学者たちを、嵐が過ぎた時には海も再び穏やかになるだろう、などと言うことしかできないような気象予報士に例えた。

このようにしてケインズ自身の言葉を用いる場合には、引用符によってそのことを明示しなければならない。より好ましい例としては、次のような言い換えがありうるだろう。

Keynes (1923, 80) は経済理論が短期の問題を回避することを非難し、長期的な結果しか予測することのできないような理論が、現実の問題に対応する上では何の役にも立たないことを鮮やかに指摘してみせた。

論文の中で他の人の研究を扱う場合には、通常は要約や言い換えを用いる。直接の引用を用いるのは、原著者が非常に的確で鮮やかな議論の仕方をしているために、あなたがそれ以上に良い言い方ができない場合、あるいは原著者が実際に何を言っているか読者が正確に確認する必要があるとあなたが考える場合に限られる。

謝辞：

公表されていない資料や非公式の資料から様々な情報やヒントを得る場合も多いだろう。そういった資料についても、もちろん出典を明示しなければならない。そうした助力が、指導教員や他の学生の助言や手助けといった、一般的な性質のものである場合には、注で（論文のタイトルか、中心的な仮説を提示する箇所に付した注の中で）謝意を示すのが適切だろう。

より具体的な助力についても、文章の中の適切な箇所に注を付けて示すことができる。また講義への出席や「個人的な意見交換」については、別のやり方として、参考文献のセクションに記載して通常の文献と同じやり方で参照を行うこともできるが、通常は「(Fred Nurk の教示による)」といった形で直接文章の中に組み込むほうが望ましいだろう。

それでは、どうか書くことを楽しんで！幸運を！